

特別講演

ワーク・ライフ・バランスを考える



ダイバーシティコンサルタント

渥美 由喜氏

プロフィール

(株)富士総合研究所、(株)富士通総研を経て、現在(株)東レ経営研究所 ダイバーシティ&ワークライフバランス研究部長兼首席コンサルタント。専門領域は、労働雇用、企業経営、人口問題、社会保障制度、家計消費。内閣府「少子化社会対策推進会議」「ワーク・ライフ・バランス官民連合会議」、厚生労働省「イクメンプロジェクト」委員、政策評価委員等を歴任。「ダイバーシティやワーク・ライフ・バランスは企業にとって単なるコストではない。むしろ中長期的に返ってくるハイリターン投資であり、経営戦略として取り組むか否かで大きく企業の明暗を分ける」と確信している。共働きの妻とともに10歳と6歳の育児に奮闘中(育児休業を2回取得)。7年前からは父親の介護も実践中。23年前から地元の公園で継続してきた「こども会」のボランティア活動をライフワークにしている。著書に『イクメンで行こう!』(日本経済新聞出版社、2010年)など。中日新聞などでの連載も多数。座右の銘は「市民の三面性=家庭人、地域人、職業人」

ワーク・ライフ・バランスというのは、非常に奥が深いものです。スティーブ・ジョブズが生前に「もし今日が自分の人生の最期の日だとしたら、今日やる予定のことをあなたは本当にやりたいたらうか」と言っています。自分の時間をどう使いたいのか、自分の人生をどう考えていくべきなのかです。私は、自分がやっていることを「6K ライフ(会社員、子育て、家事、介護、看護、子供会)」と言っていますが、これら全部を足し算で考えると24時間では足りません。考え方は真逆で引き算と掛け算です。何か新しいことをする場合には、何をやめるか、簡単にするとか、まねをするとか、人にしてもらおうとか、そういうことで減らして、掛け算をするのです。一石二鳥、一石三鳥を考えます。

子育てと介護の両方をやっていますが、私は、息子たちがいるから介護が楽になっているし、父がいてくれるから子育ても楽になっている、子育てと介護の相乗効果を実感しています。息子が難病で手術を受けた時、お医者様から「よく1歳半という月齢で気づきましたね。気づくのが遅かったら手おくれになっていたかもしれません。」と言われ、育児休業を2回とって、親として気づけて本当によかったと思いました。

最近、国は「女性が輝く、誰もが輝く」など、「輝く」という言葉をよく使います。私はこのことに100%賛成しています。ただ、もし仮に一部のバリキャリ女性だけが目立つ、あるいは、女性だけに輝けと負荷をかける風潮があるとすれば、それは違うと思います。輝きというのは、明るいところではわからない、ちょっと薄暗くなったとき、その人が目立つのではなく、周りの人を照らす人が輝いているのではないかと思います。

私は、ワーク・ライフ・バランスやダイバーシティは「よかったづくり」だと思っているのです。誰もが、皆さんの会社、皆さんの働いている職場で、男性も女性も、子育てをしている人も介護をしている人も、働いてよかったという職場づくりです。私は、ワーク・ライフ・バランスの頭文字を「分かち合い」「楽あり苦あり」「バトンリレー」だと思っています。女性活躍のネットワークは、単に女性が活躍するだけではなく、あらゆる人たちが生まれて、育て、暮らして、働いてよかったと思える「よかったづくり」のネットワークだと思うのです。

残念ながら、この取組は即効薬ではありません。すぐに職場が活性化する、というものであれば、あらゆる組織がやろうとします。でも、そうではありません。じわじわと効いてきて、いつしか健全な職場体制、強靱な地域体質ができる漢方薬なので、どうしても後回しにされやすいのです。

今、ブームではあっても、本気で取り組んでいる企業、組織、団体は、まだ1~2%です。しかし、もし今やらないで、後回しにしてしまうと、これから職場で重責を担っている管理職世代を介護ラッシュが直撃します。そうなってからやっても遅いのです。その人たちも困るし、その人たちが抜けると、周りも大変です。そうなる前に、ぜひ産業カウンセラーの皆様は、今から、誰もが、働いていて良かったと思える職場づくりを目指していただきたいと思います。